

明治大学
中村 拓志

「HAWKING HOUSE」

プロフィール

1974年 東京生まれ

石川県金沢市、神奈川県鎌倉市で少年時代を過ごす

1999年 明治大学大学院理工学研究科博士前期課程修了

同年隈研吾建築都市設計事務所入所

同事務所主任技師を経て

2002年 N A P 建築設計事務所設立

Q. 卒業設計のデザイン について
コンセプトのきっかけ

A. コンピュータを初めとするキカイに支えられて生きている宇宙物理学者ホーキングの住宅。人間って、自分の体だけではなくていろんなところでそれを拡張しながら生きている。たとえば体の動かないホーキングは、嬉しいときに車椅子を左右に揺らして笑っていることを表現した。車椅子を初めとするあらゆるもの（母親、自転車、カヌーとそれを漕ぐ仲間、杖など）は、ホーキングにとって身体の一部だったといえる。これは誰にでも言えることだと思う。住宅が身体をいかに拡張できるかを考え、健康者の体以上の能力を与えてくれるような住宅を構想した。

機械的=冷たい、非人間的というイメージに疑問を持ったことが始まり。キカイと人間の新しいあり方を住宅で表現しようと考えたのがきっかけ。

通常卒業設計では都市等、規模の大きなものにチャレンジすることが多いけれど僕は

あえて住宅を扱った。住宅のような小さい規模でも、もっと大きい問題が扱えるのでは、大きな世界観をこめられるのではないかと考えた。

Q. 当時興味のあったこと

A. デルピエロ。ファンタジーを見せる人ってすごいと思う。ファンタジスタになりたかった。

Q. 影響を受けた人

A. 建築家よりは、コンテンポラリーないろんなアーティストから刺激を受けた。

Q. 卒業設計と現在の関係性

A. 阪田誠造先生に卒業設計の講評で言われた一言がずっと心に残っている。言葉や論理で作った部分に、人は感動するのではなくて、もの（建築）を通じて言葉ではないところで人は感動させられるとことが多い、ということ。学生のときは割と論理的に説明するタイプだったけど、今は論理で

はないところ、エモーショナルな建築という部分を気にかけている。

ある時、ランバンのデザイナー、アルベール・エルバスに招待され、彼の好きなパリの建築を見に行くと、エモーショナルな空間がそこにあった。たとえば、スイーツの店ラデュレは行くと甘い気分になった。食べ物の素材の色味などで人を甘い気分させる。パレ・ロワイヤルの香水店は、部屋中にパフュームを吹きかけたかのように、香水が舞い降りて漂っているような雰囲気、建築で表現されていた。そこにテクニックはあるけど、そういうのって論理だけでは伝えられない。阪田先生が言ったことは、こういうことだったのかと、その時わかった。

今は現象や人がその場においてどのように知覚するのかを、建築で考えることが増えている。House SH, Lotus Beauty Salonにおいても人がそこに行かないと体験できない何かを表現した。写真では写らない部分、人間の知覚の構造に着目して建築を考えると、もっと面白い可能性がいっぱい広がる。

Q. このテーマをどのように身につけていったか

A. アートで言うと、作品が最初にあるのではなくて、その人がそれを体験している中で生まれる。学生時代からアートがすごい好きで、そういうアート、インスタレーションをみて学んできた。

Q. 学生に一言

A. 卒業設計のあり方も時代とともに変わっている。今、建築家は今まで必要とされてきた能力と異なるものを、求められている。建築家のこれからのフィールドは商業建築になってくる。公共建築というのは限りなく少なくなって、商業建築の中で物をつくっていかざるを得ない。そうするとマーケティング能力とか社会的ニーズなど、現代の人がどういうことを求めているのかを敏感に察知する能力が求められ出している。ところが大学では、そういったことを教えていない。現実と少しずれている。学生はそういった観点からも卒業設計を考えてもよいのではないかと。きっと役に立つと思う。

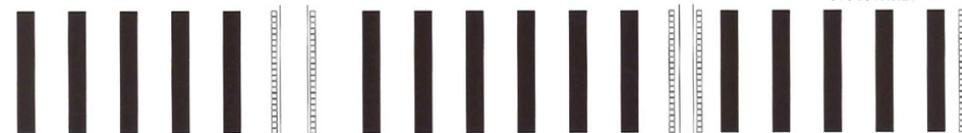


スティーブン・ホーキング
55歳、宇宙物理学者。離婚し、現在一人暮らし。二人の子供は結婚している。
筋萎縮性側索硬化症。運動系の神経機能が崩壊し、筆記や会話する能力を失っている。
しかし、思考や記憶といった高度な機能は保たれており、
コミュニケーションは音声装置やコンピューターを介して行っている。

1997年2月 スティーブン・ホーキング、新しい家の設計を依頼する

1:1000

ケンブリッジ大学講師



上 2004年 Lanvin Boutique Ginza
左 卒業設計表紙